



童話

蟹のお寺

久門 嘉祐

光子さんは可愛いくお人形さんのやうなお嬢さんであります、此の光子さんのお家は山の麓の一軒家でお父さんとお母さんと光子さんと三人きりてありました、お父さんとお母さんは毎日朝早くからお辨當を持ち鍬をかついて野良に出ます、あとは光子さん一人て一日中お留守番をするのでございます、お父さんとお母さんが野良へ出るとみつ子さんはお坐敷からお庭から奇麗にお掃除を

してからお坐敷へ可愛いお机を出して繪本を見たり繪をかいたりしておとなしくお留守番をするのでございます。みつ子さんは一人ぼっちでもちつとも淋しくはないのです。それにはわけがあるのです。みつ子さんが初めてのお留守番の日のことであります、朝の間はそうでもなかつたのですが、おひるのごはんを一人てたべてから急に淋しくなり、だん／＼に淋しくて淋しくてたまらなくなりとう／＼オイ／＼泣き出しました。けれども一軒家でお隣りもないんですもの幾ら泣いても誰も來てくれる人はいないので、ほんとうに可哀

想でせう……。すると何處から來たのか一疋の子蟹がカサ／＼お坐敷へ匍ひ上り泣いて居る光子さんのお膝の上のぼりました、光子さんは一寸は吃驚しましたが、可愛い子蟹ですもの、じつと見てゐますと子蟹はさもなかしいやうに光子さんのお膝の上でまるくなつて寝たり、又お膝からカサ／＼匍ひ下りて今度はお坐敷中をクル／＼匍ひまわつて見たり、又お膝へのつたり、あら何處かへ行つてしまつたと思ふと少時して又匍よつて來ました。見ると可愛いお花をはさみではさんで來てゐます、それを光子さんにくれるのです、こうして色々として光子さんのご機嫌をとつてくれるのでございます。光子さんは子蟹があまりに可愛いので、もう淋しいことはすつかり忘れてしまつて面白くなりました。それから子蟹も光子さんがもう泣かなくなつたので大層喜びまして一日一寸のまも光子さんの側をはなれず、ほんとうによ

いお友達になつてくれるのでございます。こんなことがあつてから子蟹は毎日／＼屹度來て面白く遊んでくれるんですもの、一人で留守番をしてゐてもちつとも、淋しくはないのでございますすると光子さんのお家から南の方にあたつて、山を越え山を越えて行くと、山と山との間に大きな／＼瓢丹池があります、深く／＼水が青くなつてゐて、すごいやうなお池でございます、昔から此の瓢丹池に大蛇が住んでゐて、若し此のお池の側を通つた人が其の大蛇を見るとすぐ死ぬのでございます、又此の大蛇が時々は其の村へ出て來て人を呑んだといふことでございます。ところが此の大蛇が何時のまにか此の光子さんを見付けました。あゝ奇麗な／＼お人形さんのやうなあのお嬢さんを呑んでやりたいと思ふと、矢も楯もたまたらずお池をぬけ出して光子さんのお家へ來ました。すると驚いたてはございませんか、大蛇の一番さ

らひな、こわい／＼蟹が光子さんの側にちつとつて居るてはありませんか、大蛇は吃驚仰天青くなつて一目散にお池へ逃げて歸りました。けれどまあしたになると、もう其のこわかつたことを忘れて夢中になつて光子さんを呑みに行きますと、矢張蟹がついて居るものですから又青くなつて逃げて歸りました。毎日／＼光子さんを呑まふとつけねらひますが、いつても／＼こわい蟹ににらまれるものですから、ぶる／＼振へながら逃げて歸るのでした。すると大蛇はイヤこれはいかんこのなりてはとても駄目じやと色々考へた末に、大蛇は眞白髪の奇麗な神様のやうなお爺さんに化けました。そして自分の姿をお池の水に寫して見て、うゝこれならば大丈夫蟹に見付けられることはないとほく／＼喜び、左手には奇麗な花を持ち右手に杖をついて道を急いで光子さんのお家へ行きつか／＼お坐敷へはいりました。そして勢一つばい

の優しい聲で、あゝ光子さんそこにあてゝあつたかわしも安心をした、とだん／＼光子さんの側へよつてこようとしてゐます、光子さんはいつに見たこともないお爺さんが不意にやつて來たのですもの吃驚して、アレーと逃げ出さうとしてゐます、蟹はこいつあやしいぜと目引もせずお爺さんをにらんでゐました、するとお爺さん、あゝこれ／＼光子さん逃げなくてもよい、私は決してこわいものではないのじや、此の山の女神様のお使者のじや、あなたをお迎に來たのじや、と、こういつて居る間に蟹は何時のまにか何處かへ行つてゐなくなつて居ります、お爺さんは此時ぞと元の大蛇の姿になり光子さんに飛びかゝるふとしました、光子さんアレッ：：と言つたまゝ氣を失つてその場に倒れてしまひました、此の時分どこかへ行つてしまつた子蟹が何處からか仲間を千も萬も數知れぬ程の蟹がお坐敷の八方から匍ひ上つて今光子さん

を呑まふとする大蛇に一度に飛びつき頭でも顔でも手でも足でも何處でも處かまわず、がちり／＼とはさみつき攻めて／＼攻め立てました。大蛇はたつた一疋の可愛い子蟹でさへこわくて／＼青くなつて逃げて歸つた位でせう、それに大きな蟹が千も萬もで攻めかけるんですもの膽をつぶしました、けれども大蛇も一生懸命戦ひましたが大勢の蟹にはとてもかなひません、とう／＼そこにはばつたりと大きな音をさせて倒れてしまひました。すると氣を失つて倒れてゐた光子さんは、今の物音にやうやく氣がついて起き上つて見ますと、これは又驚きました目の前に大きな大蛇が倒れて居ります、それに蟹も幾疋とも知れず死んで居るのでございます。それから悲しいことに光子さんがいつも可愛がつてゐた子蟹も皆と一しよに死んで居るのでございます。光子さん一目見て只々悲しくて涙をぼろ／＼こぼしてゐました。すると一疋の

蟹が光子さんの前に来てお嬢さんお怪我がなくてよろしうございました。子蟹始め私共は皆觀音さまのお使のものでございます。實はあなたをお助けするため先づ子蟹をあなたにつけてあつたのでございます。すると今大蛇が来てお嬢さんをのんでしまふとして居るといふ子蟹の報らせに、こうして皆でまいり、御覽の通り大蛇を退治しましたもう御安心なさいませ：：ではさようならと言ふたかと思ふと、これは又どうしたことか倒れて居つた大蛇の姿も見えなければ、今迄數知れん程澤山にゐた蟹も一疋もゐません。只残つて居るのは大蛇と戦つて死んだ蟹ばかりです。光子さんは額を地にすりつけて幾度も／＼拜みました：：そして子蟹始め死んで居る蟹を叮嚀に葬つてそこへお寺を建てましたといふお話。おしまひ――